

ブータン王国概略

自然

ブータン人は自分たちの国をドウルック・ユル（竜の国）と呼んでいる。ヒマラヤ山脈の南面に位置し、南の国境は標高200メートル程の熱帯でインドと接し、北のチベット（中国）との国境は7,000メートルのヒマラヤの雪山で区切られている。面積は約47,000平方キロあり九州よりやや大きいくらいであるが自然環境は豊かである。緯度は北緯27度（沖縄本島位）。

南ブータンは常緑の熱帯樹林で覆われ、象・サイ・水牛・鹿など野生動物も多い。この地帯には国境沿いにブータンの中心部へ通じる南北道路の入り口の町があり市場町として賑わっている。

平地の少ないこの国は熱帯からすぐにヒマラヤ的な丘陵地が始まり、もみじやかばの林から松・もみなどの針葉樹林へと移る。1,500メートルから2,800メートルの地域には、首都ティンプー及び主要都市が西から東へと点在し、政治・宗教・文化の中心をなしている。

北部は高山帯でヒマラヤの高峰まで続く。雨期には4000メートルの高地に青いけし(国花)やダイオウなど高山植物が美しく、ジャコウジカ・ブルーシープ・タキンなど珍しい動物が生息している。又この地域はヤクや羊を飼う牧人たちの生活の場でもある。

季節は雨期(5月―9月)と乾期(10月―4月)に分かれるが同時に四季があり春にはサクラソウやシャクナゲがすばらしく秋には色とりどりに染まる紅葉が見られる。

歴史

ブータンの古い歴史についてはあまり明確ではないが、8世紀頃には既に独立した一国として存在していたと言われる。古くからチベットとの交易が盛んで近隣の国々との交流もしていた。国教は大乗仏教でヒマラヤ仏教の開祖グル・パドマサンババ（グル・リンポチェ）を称える祭りが各地で行われる。

1616年にチベットから来た高僧ガワン・ナムゲルがこの国を統一し、彼はシャプドウン・リンポチェとして慕われ政治と宗教の支配者となった。

その後、1907年に東部出身でトンサ地方の支配者であったウゲン・ウオンチュックが王朝を創始した。1972年に即位した第四代国王ジグミ・シンギ・ウオンチュックは2006年12月に自ら退位し皇太子ジグミ・ケサル・ナムゲル・ウオンチュックが第五代国王となった。

言語はゾンカと呼ばれるチベット語に近い西部方言が公用語であるが、全国に幾つもの異なった言葉がある。

生活

人口は約70万人。国土に比べて人口が少なく、平地は少ないが肥沃な水田地帯では人々はゆったりとした暮らしをしている。とび抜けた大地主も貧乏人もいない。人口の80%は農業で余暇は少ないが、

ラマ教の祭りや国技である弓の試合などには着飾って参加しご馳走を食べて楽しむ。

他の都市とは異なり、政治、経済の中心である首都ティンプーは人口集中が進み商店、レストラン、映画館その他の設備の整った現代的な都市となっている。

食事は米が主でその他とうもろこし・そば・小麦などを食し、副食には牛肉・ヤク肉・豚肉・チーズなどと野菜に辛い唐辛子をたっぷり入れて煮込んだものがブータン料理だが、最近では各国料理も広まりつつある。バター・ヨーグルト・チーズなど乳製品も好み、バター茶やチャン、アラと呼ぶ地酒がある。香辛料に山椒やショウガをよく使い地方によりそば粉を麺にしたり、大豆で味噌を作ったりする日本的な食生活も見られる。

ブータンには、完成度の高い手工芸品がいろいろあり、現在も日々の生活に使われている。特に手織り布は男女の衣服・毛布・袋物などに木綿・野蚕・絹・ウール・ヤクの毛・イラ草などを使って織られ、草木染めも行われている。漆器の木椀・竹細工の籠・曲げ物の器・沈丁花の樹皮を漉いた紙などは、日本の伝統工芸品に似ている。装身具には銀細工のものが多い。

近代化

長年鎖国状態であったブータンが近代化を断行したのは1961年第三代国王ジグミ・ドルジ・ウオンチュックの時である。開発庁を置き、第1次5カ年計画・第2次と5年ずつ区切って実施された。これにより、先ず首都とインド国境間に道路が完成し、教育・医療・農業の近代化に力が入れた。1971年に国連加盟を果たし近年は通信・発電・文化遺産の保護など広い分野に外国からの援助を受け日本政府の援助も多い。

1974年第四代国王によって始められた観光客の受け入れが軌道に乗りその後民営化されたのをきっかけに最近では農産物や加工食品の輸出、セメント工場、水力発電、観光産業など各業種の民営化が進められている。

1983年に開設されたブータン航空（ドルック・エア）はバンコック・ニューデリー・コルコタ・ダッカ・カトマンズとパロ間に便がある。

教育制度： 幼稚園 1年、小学校 6年、中学校 4年、： 高校2年、大学 予科2年、本科3年。

BHUTAN の G・N・H とは？

ブータン王国は、国連が発表する数字などを見ると世界で最も貧しい国のひとつとなっています。しかし「わが国はGNP(国民総生産)は低いかもしれないがGNH(国民総幸福度)はどこにも負けない」と1976年に当時20歳だったジグミ・シンギ・ウオンチュック第4代国王が自信を持って言われた言葉がこの王国の不思議なすばらしさなのです。